



豊中市教育センター

〒560-0033 豊中市蛭池中町 3-2-1-600

TEL 06-6844-5290

FAX 06-6840-8127

平成19年(2007年)9月10日 第27号

背中を見せる

1歳のころの娘が真ん中に座り、まだ幼い二人の息子がその両脇でほおづえをつき、三人がひとつの方向を向いている写真を窓辺においています。

何気ない日常を切り取ったこの写真は、私の好きな写真のひとつです。

この頃、これを見るたびに思うことがあります。

自分はあまり変わっていないと思っているのですが、目の前にいる三人の今を見ると着実に年月は経っているのだということ。もうひとつは、三人の視線の先には、私たち夫婦の親としての背中があるのではないかしらということ。

子どもたちが小さかったころは「どんな人になりたいの?」と言いながら、誉めたり、なだめたり、時には叱責(これが一番多かったかな・・・)をしてきました。

親として我が子たちに親になることを望んでいるわけではありません。でも親になるのであれば、「どんな親になっていくのか」ということが、とても気になります。

日常生活の当たり前のこと、例えば、靴のそろえ方、整理整頓、掃除の仕方、洗濯物の干し方、たたみ方、衣類その他の補修の仕方、ごみの出し方、食事の内容、お箸の使い方、食べるときの姿勢、言葉遣い、人との接し方、公共の場での態度、窮地に陥ったときの対処の仕方、仕事への姿勢など、多方面にわたって先人から受け継いできた知恵や文化等のバトンを彼らに引き継ぎ、彼らが次の世代に引き継ぐことができるのか。

「親の背中を見て子は育つ」あるいは「子は鏡」という言葉どおり、問われているのは紛れもなく自分自身です。

自分が若かったころ、「こんなことはまあいいか」と自分の都合のいいように言い訳して片付けてきたこと

を振り返り、今一度、軌道修正をしなければと思うことが度々あります。

まだまだ自分たちにはできていなくても、子どもたちや次世代の人には「こんな人であってほしい」という願いがあります。

その願いをマニュアルとして伝えるのでなく、その理想像を演じ続けることで、日々の生活の中で伝え、いつか自分自身も変わっていくことを期待して、次世代の人に背中を見せ続けたいと思っています。(鈴木)



—教育相談研修—

7月23日(月)

「子どもを見る視点と教師の関わり方 パート2」

再度、講演を聴きたいというご希望に応え、今年も臨床心理士の井上序子先生にお話いただきました。

子ども理解や具体的な関わり方等、事例も含めながら様々なご示唆をいただきました。その中で、**発達障害**と**愛着障害**についての話もありました。井上先生のお話を引用させていただきながら、少しご紹介します。

○ 感情のコントロールができない

- ・ 突然怒り出す、キレる、パニックを起こす
- ・ 注意が散漫で、集中力が持続しない
- ・ 落ち着きがなく多動傾向

○ 対人関係がうまくできない

- ・ 子どもや動物（自分より力の劣るもの）に対して攻撃的
- ・ わがまま（要求過剰）

発達障害？

愛着障害？

上記の行動は、広汎性発達障害やADHDの子どもの行動と類似していますが、反応性愛着障害の子も学童期に同じような行動をとる場合があります。**発達障害**は、生まれもった脳の機能障害によるもので、親の養育の仕方の問題があるわけではありません。一方、**愛着障害**とは、乳幼児期に、本来受けられるはずの「愛着」が得られないで育った状態で、心の成長だけでなく、様々な発達も遅れてしまいます。一般的には親の育児放棄が原因と思われがちですが、親の離婚や入院等、原因は様々で、過干渉・過保護も愛着障害になると、井上先生は話されていました。

また、「**発達障害**」と「**愛着障害**」を見分ける方法の一つとして、教室を飛び出す子どもが、「先生の顔を見て飛び出す」「追いかけてくるのを振り向いて確かめる」等の場合は、自分に対する先生（大人）の反応を試しており、愛着障害と考えていだろうとも話されていました。

その他、発達障害も個人差がありますが、中には、発達障害とともに、育てにくさから愛着障害になる子どももあります。子どもの心には満たされない思いが強いため、先生が発達障害としての支援をいくらしても、なかなかうまくいかない場合もあるそうです。そういう事例の場合、**まずは、愛着障害の対応が優先されます**。その対応として、アイコンタクトで「あなたのことを大事に思っている」というメッセージを、ストレートに子どもに送り、安心感を与えることが大切です。見捨てられ感をもってしまうと、大人への不信が増幅し、人間関係を築くことができなくなってしまうからです。

子どもの特性を知り、言動の理由や背景を知り、子ども理解をすることで、具体的に見えてくるものがあります。それが子どもへの支援につながります。

教育相談の現状と取組

教育相談係では、子どもの心理面・発達面等の相談について、子どもや保護者を対象として、カウンセリングやプレイセラピー等を行っています。

平日の教育相談のほか、昨年度よりサタデー相談も始め、初期対応に努めています。

また、延べ相談件数は、年々増加しており、特に、発達に関する相談が、4年ほど前から急増しているのをうけ、今年の夏休みより発達相談もスタートしました。初期相談専用で単発相談ですが、専門の相談員が対応しています。

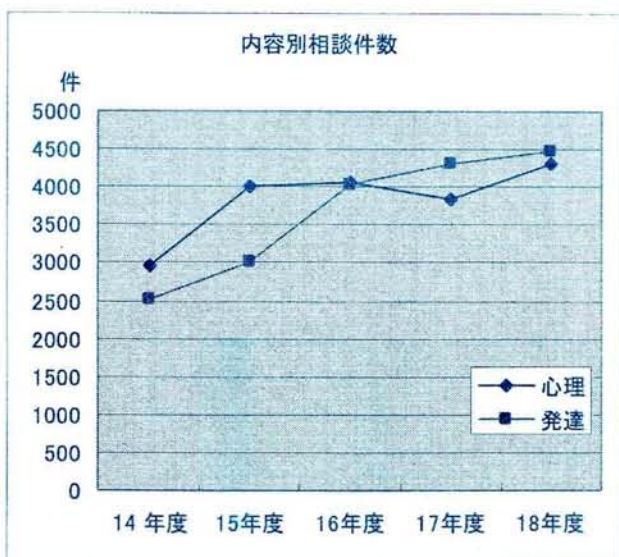
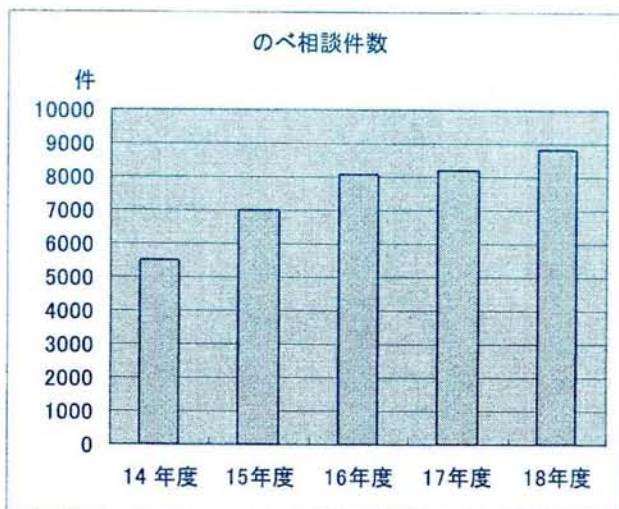
学校支援（ケース会議）

教育相談に来られているケースで、保護者の了解がありましたら、学校とセンターとの連携を図り、子どもの情報交換や関わり方等の支援を行うため、ケース会議を行っています。昨年も延べ80校園と実施しました。

また、教育相談に子どもが来られていないケースでも、先生方が、子ども理解やその対応に困られている場合、ケース会議を実施しています。

その場合は、子どもの様子を直接見ているわけではないので、一般的な話になりますが、先生からの情報をもとに、考えられることをお伝えしています。

なお、ケース会議の申込みについては、管理職を通してお願いします。



第53回小中学生理科展と科学教室

情報・科学教育係より

理科展（市立小中学校の児童生徒の自由研究作品の展示）

と き 9月13日(木)から17日(月・祝日)

午前10時から午後5時まで(13日・14日は午後7時まで)

科学教室（さまざまな科学の原理や自然の現象をたのしく実験）

と き 9月16日(日)と17日(月・祝日)

午前11時から午後5時まで(当日先着順受付。定員あり)

第四中学校自然科学クラブ・北野高校化学研究部・大阪大学サイエンスクラブ・産業技術総合研究所による実演を予定しています。

対 象 市内の小中学生

いずれも場所は教育センターです。参加無料。



悩みと成長

子どもは、生後1歳頃になると、それまで「泣く」ことで欲求表現していたものが、言葉を話しだし、歩き始め、外界に向かっていきます。親から離れて危険にあい、不安・恐怖を感じたら、安全基地である親に温かく受けとめてもらい、それを解消して、安心してまた新たな行動へ挑戦していきます。親に見守られながら、初めての経験を積み重ねて育ちます。人間関係づくりの基本を、信頼ある親子関係の中で身につけ、学ぶ大切な時期です。そうして、徐々に自主・自律の心が育ち、第1次反抗期から、第2次反抗期を経て大人へと成長していきます。

成長過程では、子ども自身も、また子育てに関わる親自身にもいろいろな悩みが生じます。悩みの質・量の違いはありますが、悩むことは悪いことではなく、悩みを成長につなげることが大切です。

教育相談で来所している小学校高学年や中学生は、友だち同士では悩みを打ち明け話し合うことはできないと言います。子どもにとって、解決する力を得たり、心の安定を図ったりする場合は、やはりまず家庭にあるということです。子どもがいろいろと悩んだ時、親に心の内を明かせることができる親子関係であれば、悩みも鬱積しないのですが、安全基地をもてずに育った子どもだとどうなるでしょうか？悩みの收拾がつかなくなってしまう場合もあります。

子どもが幼ければ幼いほど、子どもの生活環境、親の接し方が変わるだけで子どもの状態がよくなることがあります。このような場合は、親自身の在り方を考えることが必要となります。

子どもにとって、まず安心できる親がいて、その他、親しい友だちや先生などいろいろな関わりのある人の中で生きていくことができるなら、悩みがあっても、その悩みを処理し乗り越えながら成長していくことができます。

健やかな子どもの成長を望む上では、時代が変わろうと、社会状況が変化しても変わらぬ大切なことがあります。決して、感情的に対応するのではなく、きちんと叱り、ほめるべき時は、ほめるという区別が大事です。親も教師も地域の大人もそのことをおろそかにしてはならないと思います。

(小山)

